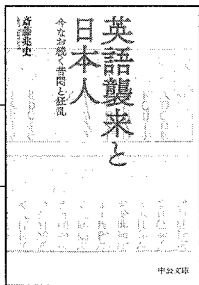


本書は、1600年のウイリアム・アダムズから現在までの日本の英語受容史である。第1章の「江戸時代の英語」では、

「フェートン号事件」(1808年)や、初めて本格的に英語を教えた母語話者のマクドナルドをはじめとし、日本の英語教育の黎明期に活躍した人物と英語について描かれている。例えば、「L」「R」の発音について、「日本人はLが発音できず、代わりにRの音を使う。これは中国人が、Rがはつきりと発音できずにしを使うとはまったく逆である。そのため、「米(nice)」が、「虱(nice)」になってしまった。」(The Complete Journal of Townsend Harris: January 12 1857) 等、「日本人の英語学習の苦労は、基本的にいまの日本人が経験しているものと変わらない。」と述べている。

著 齋藤兆史

734円 中公文庫  
03-5299-1700



英語襲来と日本人

今なお続く苦悶と狂乱

第2章の「明治時代の英語」では、文明開花による最大の英語ブーム時代、森有礼が「英語国語化論」を提唱したことや、英語はエリートだけでなく一般庶民も「文明語」として学びはじめたことが記されている。その結果「カタカナ英語」が日本人の英語学習の妨げになったことや、「学問の対象としての英語」VS「技術としての英語」の無益な二項対立も生まれたこと、また、

「受験英語の誕生」等、英語の質的変化も見られた。第3章の「大正・昭和・平成の英語」では、日本は「外国語としての英語の教授法」が世界中で初めて実践された国であることや、パーマーの「口頭教授法(1922年)」からコミュニケーションを英語教育理念に掲げている学習指導要領の内容まで紹介している。終章の「これからの英語」では、本書のまとめとして、今の日本の英語をどうするか? の問いに対する答えを得ることができ。(愛知教育大学教授・高橋美由紀)